
シンポジウム 3

男性不妊症に対する最新の生殖医療

座 長 辻 村 晃 (順天堂大学浦安病院泌尿器科)
白 石 晃 司 (山口大学大学院医学系研究科泌尿器科学講座)

司会のことば

男性不妊症に対する生殖医療の最前線というタイトルにて5名の演者の先生方にご講演いただきました。

辻村 晃教授(順天堂大学浦安)からは、本邦で初めて作成された男性不妊症診療ガイドラインの委員長として、その作成の経緯やそこに掲載されているCQを中心にご解説いただきました。これから男性不妊診療を始める先生方への啓発のみならず、エキスパートの先生方においても役立つ内容でした。また、日本性機能学会臨床研究促進委員会(辻村委員長)にて施行された我が国における性機能障害の実態調査委の内容にも触れられ、若年者の勃起障害の高い有病率などのご解説は、我が国の生殖医療の背景を考察するうえで、貴重な情報となりました。

今回のシンポジウムは、これから男性不妊診療を始めようとする施設、ある程度行われている施設、継続的に行われている施設、および教室のメインテーマとして行われている施設からご発表いただくことで、西日本地区の生殖医療の現状を把握し、問題点を明確化・共有し、地域として診療レベルの向上を図るきっかけとすることを目的といたしました。甲斐博宜先生(大分大学)からは、アンドロロジー研修の受け入れの難しさ、婦人科とのコラボが施設や地域により多岐に亘っており、例えば精巣内精子採取術(TESE)後の精巣組織の処理など培養室の体制やレベルが異なり一筋縄ではいかないこと、などの問題点を挙げられました。上村慶一郎先生(久留米大学)はアンドロロジー診療を積極的になされ、筑後地区の婦人科からの紹介数などの増加について現状のご報告をされました。泌尿器科一般との両立についての難しさおよびやり甲斐、アンドロロジー診療を行う人材不

足についても言及されました。男性不妊手術は基本的にはマイクロサージェリーであり、専門家1人で成り立ちそうに見えますが、チーム医療の醸成と行うことで、組織および地域においてサステナブルな診療を行うことの重要性を指摘されました。岡山大学および関連施設の現状を富永悠介先生(岡山大学)にご報告いただきました。特筆すべき内容といたしましては、若手医師へのサブスペシャリティーに関するアンケート調査にて、アンドロロジーがオンコロジーについて人気があったとの結果です。男性不妊に対する真摯で継続的な取り組みが表れた結果であると理解できました。白石(山口大学)は、精索静脈瘤や精路再建に関する新規術式の報告や、非閉塞性無精子症に対する精子採取不可能であった症例に対するサルベージ内分泌療法に関するトピックスを発表いたしました。新規薬物療法としてアロマターゼ阻害剤についての臨床研究などを西日本地区を挙げて施行できれば幸いと思います。

今回のシンポジウムで、西日本地区において男性不妊診療は限られた施設、地域においてのみ施行され、婦人科医および患者カップルに十分に生殖医療の最新の診療がお届けできていないことが改めて感じられました。関東及び関西圏と異なり、西日本地区は広いため、電車で30~40分で専門施設に容易にアクセスできる状況ではなく、各県に最低1名程度の生殖医療専門医が必要と考えられます。多くの先生がたから、ハイボリュームな施設でのアンドロロジー研修の要望をいただいております。腹腔鏡からロボット手術へ柔軟に対応してきた泌尿器科医は、マイクロサージェリーを中心とした男性不妊診療にも柔軟に対応できるであろうことは想像に難くありません。